

武蔵野日曜集会

律法と罪

——ローマ書第7章——

1978年6月11日(武蔵野)

小池辰雄

聖書の読み方 律法と夫 律法から解放 他の夫 律法は罪なるか 罪と死と生 肉なる者
パリサイとサドカイ 罪の奴隷 罪の法と心の法 罪法と霊法 死の体 キリストに頼りて神
に感謝す 法則に乗っかっていることが自由 聖霊の力

【ロマ7】

「兄弟よ、なんじら知らぬか(われ律法を知る者に語る) 律法は人の生ける間のみ、之に主たるなり。² 夫ある婦は律法によりて夫の生ける中は之に縛らる。然れど夫死なば夫の律法より解かるるなり。³ 然れば夫の生ける中に他の人に適かば淫婦と称えらるれど、夫死なば、その律法より解放さるる故に他の人に適くとも淫婦とはならぬなり。⁴ わが兄弟よ、斯のごとく汝等もキリストの体により律法に就きて死にたり。これ他のもの、即ち死人の中より甦えらせられ給いし者に適き、神のために実を結ばん為なり。⁵ われら肉に在りしとき、律法に由れる罪の情は我らの肢体のうちに働きて、死のために実を結ばせたり。⁶ 然れど縛られたる所に就きて我等いま死にて律法より解かれたれば、儀文の旧きによらず、霊の新しきに従いて事うることを得るなり。

⁷ 然らば何をか言わん、律法は罪なるか、決して然らず、律法に由らでは、われ罪を知らず、律法に『貪る勿れ』と言わずば、慳貪を知らざりき。⁸ 然れど罪は機に乘じ誠命によりて各様の慳貪を我がうちに起こせり、律法なくば罪は死にたるものなり。⁹ われ曾て律法なくして生きたれど、誠命きたりし時に罪は生き、我は死にたり。¹⁰ 而して我は生命にいたるべき誠命の反つて死に到らしむるを見出せり。¹¹ これ罪は機に乘じ誠命によりて我を欺き、かつ之によりて我を殺せり。¹² それ律法は聖なり、誠命もまた聖にして正しく、かつ善なり。¹³ 然れば善なるもの我に死となりたるか。決して然らず、罪は罪たることの現れんために善なる者によりて我が内に死を来らせたるなり。これ誠命によりて罪の甚だしき悪とならん為なり。¹⁴ われら律法は霊なるものと知る、されど我は肉なる者にて罪の下に売られたり。¹⁵ わが行うことは我しらず、我が欲する所は之をなさず、反つて我が憎むところは之を為すなり。



16 わが欲せぬ所を為すときは律法の善なるを認む。17 然れば之を行ふは我にあらず、我が中に宿る罪なり。18 我はわが中、すなわち我が肉のうちに善の宿らぬを知る、善を欲すること我にあれど、之を行ふ事なければなり。19 わが欲する所の善は之をなさず、反つて欲せぬ所の悪は之をなすなり。20 我もし欲せぬ所の事をなさば、之を行ふは我にあらず、我が中に宿る罪なり。21 然れば善をなさんと欲する我に悪ありとの法を、われ見出せり。22 われ中なる人にては神の律法を悦べど、23 わが肢体のうちに他の法ありて我が心の法と戦い、我を肢体の中にある罪の法の下に虜とするを見る。24 噫われ悩める人なるかな、此の死の体より我を救はん者は誰ぞ。25 我らの主イエス・キリストに頼りて神に感謝す、然れば我みずから心にては神の律法につかえ、肉にては罪の法に事うるなり。

●聖書の読み方

今日はローマ書7章です。パウロの例えというのは、何と言ってもその時代の背景による例えなので、今の我々日本人にはピンと来ないような言い方もあるわけです。そういうことは言葉面にとらわれないようにしてください。そういった昔の観念に囚われないように。パウロがそういったような例えで言おうとしていることは、もう一つ奥をさぐれば一体どういうことかと。聖書の読み方というのは、いわゆる文字通りエラク固く取る人があるけれども、それでは反つて本当の聖書の精神をとりそこねる。とにかく、相対的現実で、歴史的、地理的ないろんな制約のもとに言われている。それをそのまま、いつの時代も同じというわけにはいかない。そういった相対的特殊な言い方をしながら、その奥にどういう真理が語られているかと、それを捉むことです。また我々の相対的、歴史的な、地理的な環境において、そういう捉み方をすれば、またそれがちゃんと生きてくるわけなので、どうぞ、聖書の読み方がいわゆる、「これはこう解釈しなくてはいけない」とかと、よく教会ではある一つの型にはまっているけれども、それではダメですから。

●律法と夫

「兄弟よ、

「兄弟よ」と言われたら、女の方は「姉妹よ」と読めばいい。

なんじら知らぬか（われ律法を知る者に語る）

「律法を知る者」とはユダヤ人のことです。けれども、この場合の「律法」という字に定冠詞がついていないものですから、「一般の律法」と解釈する学者もいますけれども、しかし、パウロが定冠詞をつけなくても、この場合はもちろんモーセの十戒を中心としたところの旧約の律法です。それからまた、我々としては、何も旧約の律法に限らず、「およそ



「律法」というように解釈して一向差し支えない。ということは、相対的な意味はこうであるが、また我々にとつては、こういう幅も持つているということ。言葉の意味というものは、ただ一義的ではない。両義的あるいは大義的な含みを持つている、構造を持つている。言葉というものは結局、いわば暗号なんですから、すべて。

「律法を知る者に語る」という。要するに、道徳法、またユダヤ人にとってはモーセの律法です。

律法は人の生ける間のみ、之に主たるなり。

地上において生きる間、律法にしばられている。パウロがユダヤ教にいたときは、正にそのような人だった。その角度から彼は言っているわけです。人間にとって律法は主であると。

2 夫ある婦おんなは律法によりて夫の生ける中は之しばに縛らる。

即ち、夫婦の関係というものは、地上では一対一ですから、それで「縛られている」と。それは律法が示しているところなんだと。モーセの十誡もそうですし、キリストも、もちろんその意味で言われました。「縛られている」なんていう言い方をすると、今のご婦人連中は、「夫に縛られているなんて、そんな結婚というものがあるか」ということになりますから。聖書では夫と妻との関係は主と従です。「妻は夫に従え」とエペソ書に書いてある通りです。日本においても古来からそういうようなわけですけれども。それでは、どんな場合にも従うかという、そういうことではない。一般的にそういった原理として、関係としては、そういうことで、「之に縛られている」。我々が律法に縛られているように、道徳法に縛れているように、夫に縛られているんだと。

然れど夫死なば夫の律法より解かるるなり。

「夫」という律法。律法と夫というものを例えて一つにしているわけだ。パウロさんのこの例えはそれほど論理的に書いてないけれども。夫の死を通して妻は解放される。縛られるから、解放だ。結婚生活はまるで、奥さんにとっては拘束みたいですね。「夫が死んだ方が解放されている」なんて、平面論理から言うと、そういうことになる。

人間が死ぬというと、律法から解放される。生きているうちは解放されないと、そういう言い方をしている。だから、夫というものは律法的な力を持つているというわけだ。しかし、日本では、「貞婦二夫にまみえず」というようなわけで、夫が死んだあとで独身でいる方が多いわけです。それでは、男の方がずるいぞなんてなことになるですね。

● 律法から解放

3 然れば夫の生ける中に他の人に適ゆかば淫婦と称えらるれど、夫死なば、その律法より解放ときさるる故に他の人に適ゆくとも淫婦とはならぬなり。

姦淫ということですね。「夫の生ける中に他の人にゆかば」というのは、ホセア書のゴメルという婦人は正にこれをやってしまったわけだ。だから、姦淫の妻ということに例えた。



しかし、神さまはホセアに向かって言っている。

「そういう淫婦をも決して捨ててな。イスラエルの民は姦淫の妻みたいに、他の神を拝する信仰的な姦淫を犯しているが、私はそれでもイスラエルを捨てないんだから、お前も決して捨ててはいかんぞ」

と。ホセア書3章をご覧なさい。出ているから。あれはもう半奴隷状態になっていた奥さんなんです。他の男のところへ行つて、それでまた捨てられて、惨憺たる事態になっていたらしい。

「エホバわれに言給いけるは、汝ふたたび往きてエホバに愛せらるれども^{かえ}転りてほかのもろもろの神にむかい葡萄の菓子^{かえ}を愛するイスラエルの子孫のごとく、そのつれそうものに愛せらるれども姦淫をおこなう婦人を愛せよ。

²われ銀十五枚おむぎ一ホメル半をもてわが為にその婦人をえたり。

その女を買い戻してきた、贖ってきたと。

³我これにいいけるは、汝おおくの日わがためにとどまりて淫行をなすことなく他の人にゆくことなかれ、我もまた汝にむかいて然せん。」(ホセア3:1

3)

「私もお前に対して忠実であるぞ。だから、もうよしなさい」というようなわけであります。

これは、死ねば律法から解放されるように、他の人に行つてまた再婚しても一向差し支えないと、パウロはそう言っているわけだ。藤井先生は再婚否定論者でした。まあ、いろいろありますが。

⁴わが兄弟よ、斯のごとく汝等もキリストの^{からだ}体により律法に就きて死にたり。

妙な言い方をしてますね。キリストが自分の体を十字架につけて、そして贖われた。だから、律法についてはもう死んだ者である、律法の支配からは逃れたと。

「死ねば解放される」と言つたつて、この解放は本当の解放ではないですよ、先にこう言つたけれども。人間が律法に縛られている。けれども、キリストの十字架の死によつて、今度は人間が死ななくても——我々は生けるまま、生きているまま——キリストの十字架の死によつて、この律法から解放された。これが本当の解放だ。解き放された。要するに、死は死なんだけれども、この死は贖罪死なんです。キリストの贖罪死によつて、生きたままでこの律法から解放されて自由である。

ここところは、「律法に就きて死にたり」と妙な言い方をしてます。律法に対して死の関係に入ったと。死というものがとにかく、律法との関係を断つものだから。十字架の死によつて、律法に対しては死の関係に入ったと、そういったことを「律法に就きて死にたり」という妙な言い方をした。



●他の夫

⁴……これ他のもの、即ち死人の中より甦えらせられ給いし者に適き、神のために実を結ばん為なり。

もう、そこへ行くと、ちよつと論理がおかしいですからね。とにかく、「他のものにゆき」というんですから。妻のことで言う、夫が死んだから、即ち夫に対して死の関係に入つたから、律法なる夫に対して、妻は——人間は、自分は——キリストの十字架によって、今度はキリストとの新しい結婚の中に入つた。再婚と言つたらおかしいかなんか知りませんけれども。「他の夫にゆくとも、それは罪ではない」とさつき書いてあつたでしょ。「他の夫」というのは、これはこの場合、キリストになるわけです。律法という夫の束縛から、キリストの十字架によって贖われて、今度はキリストと結婚したという言い方なんだ。

「甦えらせられ給いし者にゆき」というのは、即ち復活のキリストにゆき、活けるキリストに連なつて、そして神のために本当の実を結ぶ新しき生涯に入る、ということなんだ。これが新生というわけだ、再婚なんて言わなくなつて。これが本当の新生です。

⁵われら肉に在りしとき、律法に由れる罪の情は我らの肢体のうちに働きて、死のために実を結ばせたり。

「肉」というのはいろんな意味を持っていますけれども。「生来の我」ということです。生来の我というものであつたときに。

「律法に由れる罪」なんて言つたつて、分からないでしょ。律法は逆に罪を刺激するから、そういう言い方をしている。律法は我々の中にある罪を刺激して、なおさら我々を罪びとにしてしまう。律法によって、反つて罪は増して来るんです。「罪の情は我らの体のうちに働いて、死のために実を結んだ」と。その実は、死への実を結んだという。「罪の価は死なり」という。

人間は——「妻＝人間」と「夫＝律法」——律法との結婚では、逆にこの人間の中にあるところの罪が刺激されて、死に到らしめられる。だから、この律法から解放されなければどうにもならない。解放されるためには、死ななければならぬけれども、自分が死んだら、それは実は本当の解放ではない。先にパウロが言つたこの死というのは、キリストの十字架の死の、贖罪死の伏線として言つた死なんです。キリストの贖罪死によって解放されて、この罪からも解放されるということになる。それだから、死という実を結んでしまう。

⁶然れど縛られたる所に就きて我等いま死にて律法より解かれたれば、儀文の旧きによらず、霊の新しきに従いて事^{つか}うることを得るなり。

「縛られた所について我らはいま死んで、

即ち律法から解放されたから、キリストの十字架と共に死んで、

律法から解放されたから、もはや律法の儀文の旧きによらないで、



即ち「すべし、すべからず」の儀文の旧きによらないで、キリストの新しい霊に従って仕えることができるのだ」と。まあ大体、これはそういう筋です。

● 律法は罪なるか

7 然らば何をか言わん、律法は罪なるか、決して然らず、

律法はそんなに悪いものであるなら、それでは、律法は罪かと。決して然らず。「メーゲノイトー」という字ですが、「決して然^{しか}あらざれ」というような言い方です。

律法に由らでは、われ罪を知らず、

律法は何も悪いものではない。律法は罪ではない。律法というものは神の啓示によって与えられたものだから。律法以前だったならば、いわゆる自然的に動物みたいに生きるけれども、律法が来たから、一つの生きるべき法則が与えられた。律法によらなければ、我々の中にあるところの、罪がどんなものであるかが分からない。律法という鏡に照らして、初めて罪が分かって来たんだと。

これはカントの道徳法で言うところ、人間は先験^{せんけん}的に道徳の法則をもっている。だから、それによって、その法に従わないことが即ち罪であると。道徳哲学ではそういうことになる。啓示の宗教においては、律法は即ち「普遍妥当の道徳法則」という言い方でないですから、これは神から示されたところのものである。示されたものが我々の心の中にまた律法として植えつけられているから、それによって私たちには罪が分かってきた、というわけです。

律法に由らでは、われ罪を知らず、律法に『貪^{むさぼり}る勿^なれ』と言わずば、慳^{むさぼり}貪^{むさぼり}を

知らざりき。

本能的には「貪^{むさぼり}るなれ」なんて言わなくなつて、貪^{むさぼり}りが悪いぐらいのことは、これはカントが言う通り、人間が持っているところの良心の声でもって分かるわけですけども。しかし、特にユダヤ人はこういった宗教的な啓示の宗教をもらった民ですから、そこでハツキリ、『貪^なる勿^なれ』と言わずば、慳^{むさぼり}貪^{むさぼり}を知らざりき』というのは、ユダヤ的、歴史的な現実においては正にその通りです。

8 然れど罪は機^{おり}に乘^いじ誠命^{いましめ}によりて各様の慳貪^{むさぼり}を我がうちに起こせり、

「慳貪^{むさぼり}」にもいろいろな貪^{むさぼり}りがありますから。こういう言い方をしてくると、「罪」というものは擬人化されている。パウロが「罪」と言うときは、観念的なものでなくて、霊的な実在です。要するに、「サタン」と同義語的な気持ちを持つている。

「サタンの力である罪は、律法により機^いに乘^いじて、誠命^{いましめ}によって様々の貪^{むさぼり}りを我がうちに起こせり」

と。パウロが特にここで「誠命」と言っているのは、律法のなお不文律的ないろいろな律法がある。それは誠命なんです。不文律な律法によっていろいろ、また貪^{むさぼり}りの種類がハッ



キリしてくるから、それでうちに起こす。示すことによって、その衝動を逆に起こすという。「勉強しろ」というと、逆に「怠けてやろう」なんて思う。「お前は勉強しているね」と信ずると、勉強してないのが、「いや、これは勉強しなくては悪いな」と思ってくる。律法は罪を刺激するけれども、恩恵の言葉は逆にそれをプラスに向ける。だから、子供をあまり叱るよりも、良い点を大いに認めて、それを助長してやるという面がまた大事なことです。全然、叱らないのもまた困るけれども。ことに少し性格の弱いのは、叱るといじけてしまうから。少し強いやつは時々叱った方がいい。弱いのは、むしろ良いところを認めて大いに伸ばして、それを中心に展開させていく。とにかく、学校の先生の教育ももちろん大事なんだけど、家の中ではお母さんの教育が一番大事なんです。

「人の母たることは最大の務めなり。最大の事業なり」

と、ホイットマンが言いました。「孟母三遷」もうぼさんせんなんていうが、孟子もうしのお母さんも偉かったらしい。

8……律法なくば罪は死にたるものなり。

「あたかも死んだものだ」という言い方です。「律法がなければ罪は死にたるものなり」とは妙な言い方ですね。律法がなければ、罪は生きるのではないですか。ところが、「律法がなければ罪は死にたるものなり」と。律法があるから罪が刺激されて生きてくる。けれども、律法がなければ、罪は相手がいなくなってしまうから、死んだようなものだ。こういう妙な言い方をしているわけです。

●罪と死と生

9 われ曾て律法なくして生きたれど、

パウロは大体10歳くらいまで自然の生き方をしていた。律法の世界をまだ知らなかったからね、ガマリエル門下に入ったのが多分12歳くらいです。

誠命きたりし時に

律法や誠命がやってきて、それが自分の意識の中に入ってきたものだから、

罪は生き、

反って罪が目覚めてきて、罪は「死んだようなものだ」というのは、律法がなければ罪がないのではない。罪は正体が分からなかったから、死ぬるがごときものだけでも、律法がやってきたらば罪は目覚めた。それで罪が生きたと、こういう言い方をしている。

我は死にたり。

罪が生きて、罪は力があるから、自分の方は、「我は死んだようなことになった」と。本当に死ねばいいけれども、死に切れやしないです。しょっちゅう生き返ったりしている。それで、罪と死との関係が生との関係になる。これが本当に生きるためには霊的に生きなければダメだ。要するにこの世界は、自然的な生まれつきの我というものは霊的な生命でな



いんです。

¹⁰而して我は生命にいたるべき誠命の反つて死に到らしむるを見出せり。

「律法を行う者は生く」と旧約聖書には書いてある。律法を行えば——「律法を行う」というのは、律法に本当に従えば——生きる。

「生命にいたるべき誠命の反つて死に到らしむるを見出せり」

と。律法は人を生かすためにある。

「お前はこれを守れば永遠に生きる。エホバとイスラエルの関係は永遠である。守らなかつたら、だめだ。わが民でなくなるぞ」

と。ですから、律法は生かすものであったんだけど、逆に反つて、死に到らしめる。論理から言うとおかしいですよ。律法は我々を縛るものだ。本当に律法が縛ってくれれば、それは律法の中に生きていくわけだよ、本当に縛れば。でも、解放されたい。だから、平面論理で考えていくと、何を言っているのか分からなくなってしまう。律法を本当に守れば生きるけれども、律法に逆らうから、反つて律法に逆らう罪が自分の主体となるから、罪が自分を殺すということになる。逆らうものはこの罪なんだ。我ではないんだ。そういう面も持っているわけです。

¹¹これ罪は機に乗じ誠命によりて我を欺き、かつ之によりて我を殺せり。

罪の衝動がいろいろあるでしょ。力をもっている。それが誠命に、律法に従えば死なないんだけど、逆に律法によって、律法を利用して、罪が自分を虜とりこにして、欺いて自分を殺すと。「欺く」とは、当てがはずれてしまったり、いろんなことの内容を言うわけなんだろう。そういう非常に心理的な内容を言っているようです。要するに、どの道これは自分は生きるわけです。

¹²それ律法は聖なり、

神さまから来たものだから、神聖なものだと。

誠命もまた聖にして正しく、かつ善なり。¹³然れば善なるもの我に死となりたるか。決して然らず、

では、善なるものは自分に死となったのかと。決してそうではない、律法が悪いのではないと。

罪は罪たることの現れんために善なる者によりて我が内に死を来せたるなり。

サタンの力、罪というやつが、律法は生かそうとするのに逆に自分の中にいよいよ罪の正体を現して、自分を死に到らしめる。問題は要するにこの罪なんです。罪が問題です。

これ誠命によりて罪の甚はなはだしき悪とならん為なり。

誠命や律法によって、罪がどんなに悪いものかということがハッキリするためである。



●肉なる者

¹⁴ われら律法は霊なるものと知る、

聖にして「霊なるもの」とは「プニューマティコス」という字です。

されど我は肉なる者にて罪の下に売られたり。

律法は神から来たものだから、霊であり、聖である。聖にして霊なるもの。それで、「我は肉なる者にして罪の下に売られてある」と。罪という力あるものの中に奴隷になって売られた。罪の奴隷だよ。罪に買われて、奴隷になってしまっている。だから、そういう事態を「肉」という。

「肉」というのは、パウロはいろんな意味に使っている。「人類」のことも肉という。また、生まれつきの「人間性」そのものが肉と言われます。少し狭い意味では「骨肉」のことが肉。もう少し平べったい意味では「肉体」が肉。それから、知情意をもった人間の、「自分中心の人間」が肉。

この今、私が五番目に言ったのが大事な「肉」の意味です。そして、六番目に言っているのが同じようなことですから、要するに、罪の配下になって、「罪に負けている弱い存在」、これが肉。五番目に言った「自己中心的なエゴイズムの存在」が肉。我執的なんです。これが肉の意味の一番大事な意味です。罪の力に勝てない、負ける存在。この場合の「罪」というのは「サタンの力」と同じです。ところが、自己中心の我執の存在自身は、これがまた罪なんです。だから、この五番目と六番目は離すことができない関係にある。我執というやつは、罪というようなサタンの力にはかなわない。その傘下にあるんだから。これは律法を守れないんです。律法には従えない。

●パリサイとサドカイ

ところが、パウロさんは

「律法の義につきては責むべきところなし」

と言ったでしょ。パウロはこの律法を聖なる霊なるものとしての、律法の一番本質をつかまないで、彼はただいわゆる律法の外側から、律法というものを――彼は意志的な強い人間だから、我執が強いだけまた意志も強いものだから――とにかく一生懸命で守っていた。これはパリサイです。パリサイ根性のパウロは意志が強いから、

「私は律法をちゃんと守っている。律法の義につきては責むべきところがなかった。

キリストなんていうやつを信じるやつはけしからん」

とやっていたわけだ。紀元前二世紀頃にいわゆるユダヤ教の中で「ハシディーム」というのがある。「ハシディーム」というのは「敬虔なる人たち」という意味で、信心深い霊的な者です。そのハシディームの流れから「パリサイ派」というのが出てきた。これはモーセの律法また誠命を非常によく研究し、またそれを外側から実行する。自分たちは、それが



できないやつらとは違うんだと言って、宗教的・道徳的なエリート意識をもっていた。これがパリサイなんです。

もう一つ、「サドカイ派」というのがある。これはもともとサドクという祭司、ソロモン王朝時代からサドク族の流れで、宗教的儀式的なことで事足りりとした。またギリシヤ文化が来たときに、かなりギリシヤ的なものと妥協しているご連中です。上層階級の、いわゆる文化文明人なんだ。それで、復活や天使を信じない。パリサイの方は復活や天使を信じる。これは保守的な方だから。サドカイ派は少し進歩的な妥協派の方、文化人の上流階級だ。パリサイ派の方は中流階級です。

パウロはそういうパリサイ精神だ。「律法につきては責むべきところなし」なんて、大いにいい気になっていた。しかし、自己義認をして、自己を義しとしているのは実は罪なんです。これはサタンの方だ。サタンは己を義しとして神さまに対抗したやつだから。そういう堕落天使だ。神ぬきに——傍若無神、傍ら神無きが若くに——我を義しとしているご連中。それはどんなに立派そうに見えても、これは偽善者です。

このパリサイというのはあら顕わなる偽善者だ。サドカイは隠れたる偽善なんだ。文化人というやつは、みんないかにもよさそうだ。けれども、その奥には偽善が隠れている。顕わなる偽善と隠れたる偽善、私は今日初めてそんなことを言う。パリサイとサドカイがちょうどそういった性格をもっている。今の人たちもこのどっちかがあるよ。パリサイとサドカイ、どっちも偽善だ。キリストが、

「偽善なる学者、パリサイ人よ」

と言ったのはこれです。サドカイの方はカモフラージュしている。パリサイの方はもってハッキリしているけれども。このハッキリとした偽善者をキリストはひっくり返した。

●罪の奴隷

自己中心の、エゴイズムのもの、これが「肉」です。これは同時に「罪びと」なんです。罪と肉は離すことができない。肉というやつは罪の力の下にある。ということとは、自己中心ということが既にもう罪の力が現れている。自己中心は実は、大いに自主的かと思ったら、どっこい、それはサタンの奴隷なんだ。人間というやつはどっちかの奴隷になるんです——「奴隷」という言葉はおかしいけれども昔の言い方で言う——サタンの僕になるか、神・キリストの僕になるか。どんなに自由とか自主なんて言ったって、どっちかなんだ。本当の神の奴隷になれば本当の自由になる。

¹⁴われら律法は霊なるものと知る、されど我は肉なる者にて

自己中心のやつであって、罪には勝てない。だから、

罪の下に売られたり。

罪の奴隷なんだと。あの頃は「奴隷」というのはいっぱいいましたから、パウロはこうい



った奴隷というような言葉を使う。「キリストの僕」というのは「キリストの奴隷」と同じ字ですから。

¹⁵ わが行うことは我しらず、

盲目的に無意識的にやることが、この「カテルガルゾマイ」という字です。自分がとにかく、無意識的に盲目的にやることは自分は知らない。

我が欲する所は之をなさず、

欲することはやらないと。これは責任をもって自覚してやる字で、「ブラッソー」という字です。

反って我が憎むところは之を為すなり

これは「ポイエオー」という字で、これは憎むことを何か罪にとらえられて、やむを得ずしてしまったというのがこの「為す」という字です。機械的にすること。

¹⁶ わが欲せぬ所を為すときは律法の善なるを認む。

自分が欲しないことをするとき、律法は善であることを認めると。即ち、自分がやっぱり逆らっているんですから。

¹⁷ 然れば之を行うは我にあらず、我が中に宿る罪なり。

「我」というものを二重構造に考えている。行うのは我に相違ないんだけど、自分ではないと言っている。それは罪だと。自分の中に善意志はあるんだ、カント的に言えば。良心があるんだから。だけれど、その良心が、願いが願い通りに行かない。今の言葉で言うと、良心が踏みにじられてしまっている。私がしているのではない、そいつは罪がやっているんだと。罪になすりつけているようなことを言っている。だけれど、この罪は「わがうちなる」と言って、自分を支配している罪だから、大きな気持ちで言えば、これは自分がやっぱりやっていることになりますけれども。「我」というやつが罪という傘下の中にいますから、良心は力を持たない無力の良心です。ここでは「良心」という言葉は使っていないけれども、パウロは他のところで良心という言葉を使っています。

¹⁸ 我はわが中、すなわち我が肉のうちに善の宿らぬを知る、善を欲すること

我にあれど、之を行う事なければなり。

善は宿っているんです。宿っているんだけど、肉のうちに、即ち生まれつきの自己中心の自分の中には、善の実力が宿っていないのを知っている。善は欲するんだ。善はあることはあるんだけど、善の実力がいないことを知っていると。パウロの言葉というのは、その言葉面だけでは分からない。その言葉を言いながら、どんなことを今言おうとしているかを察しないね。非常に論理的ではないですから。また、こういうことは、あまり論理的にも言い切れないですから、非常に難しい。



● 罪の法と心の法

19 わが欲する所の善は之をなさず、反つて欲せぬ所の悪は之をなすなり。 20 我もし欲せぬ所の事をなさば、之を行うは我にあらず、我が中に宿る罪なり。

21 然れば善をなさんと欲する我に

なるほど善をなさんと欲することは欲しているんだ。

悪ありとの法を、われ見出せり。

善に対して悪。どうしても、悪い考え、悪い願いがあるという、そういった法則を自分は見いだしたと。要するに、それは罪の法則だ。力を持った罪の法則なんだ。

22 われ中なる人^{うち}にては神の律法を悦べど、 23 わが肢体のうち^{うち}に他の法ありて我が心の法と戦い、我を肢体の中にある罪の法の下に虜^{とりこ}とするを見る。

「中なる人^{うち}」と「心の法」という。「中」と「心」がここでは同じような角度で使っている。「われ中なる人^{うち}にては神の律法を悦べど」と。これは困るよね。パウロが、神の霊に、キリストの霊に救われた者をまた「中なる人」とも言っている。この場合の「中なる人」はそれほど強い意味ではない。この場合は、善を欲しているような、そういった「中なる人」は神の律法を悦んでいる。旧約聖書でも、

「日も夜もこれを思つて喜んでゐる」

なんて、詩篇の1篇にも書いてある。

人間は生まれつき、「万人はこれ罪びと」と言うでしょ。「罪びと」と言つたつて、もちろん我々の構造は何も悪ではない。善が大いにある。虚心坦懐にそうですよ。相対的に言つて、人間は、孟子が言う通り、「性善説」とまで言いたいところですよ。性善だつてある。そうでなかったら、信仰のない人はみんな悪いかと、冗談じゃない。いくらでも善い人がたくさんいる。性善ということも本当だし、また「性悪説」を言つた人もある。性悪も本当だ。みんなそれぞれの角度から見れば、それぞれが真理性をもっている。それで言い切れるものではないんです、人間なんていうものは。

だから私は、人間はドラマチックな構造だと言う。人間は劇的な構造になつているので、こうであるなんて一元的に言い切れるようなものではない。そこを間違えないでくださいよ。あんまりプロテストタントの神学は割り切りすぎるから。性善も性悪も、どっちもあるんだ、人間には、善も悪も。でなければ、善も悪も分らない。生来の人間は我執的な傾向を持っていることは事実だけれども、我執的だからと言つて、全部それが悪いとは言ひ切れやしない。修養によつて、非常に立派な場合もいくらでもありますから。それは本当にそうです。そうかと思うと今度は、キリストに救われたつて、一向ダメなやつもいるし。だから、人間のドラマチックな構造を一応知つて、あとはもう自分がどのように生きるか、また神さまにどのように判断されるかと。もう、「神—キリスト—我」のただ直結の関係だけです。人がどうだこうだなんて、人の品定めなんかできるものではない。



● 罪法と靈法

わが「中なる人^{うち}」という。本来の自分というものがある。即ち、神の似姿に造られている。「生来」と「本来」とをもし使いわけるとするならば、神さまに造られた本来の自分というものは、「衆生^{しゅじょう}ことごとく仏性^{ぶつじょう}あり」

と仏教の方で言う通り、それは「中なる人」です。そして、生来という——生まれつきの自分は、我々はどうも自己中心で困るなあという——そういう両面があるわけだ。そういった本来の自分なる「中なる人」にては、神の律法を悦ぶんだ。確かに、神さまの律法はうれしい。だけれども、うれしいと思うけれども、これが本当にうれしくて完全にそれを実行するかというと、どつこいそうはいかん。肉なる、即ち自己中心というやつがあると。

²³ わが肢体のうちに他の法ありて我が心の法と戦い、我を肢体の中にある罪の法の下に虜^{とりこ}とするを見る。

わが肢体のうちに、この体の中に、別な法則が、異なる法則があつて、そして我が心の法、即ち神さまを悦ぶような本来の自分の法則と戦つて、我を肢体の中にある罪の法の下に虜とする。サタンの力、悪の力、即ちそういった罪——それは自己中心というものと密接に関係しているやつ——そういう法則の中に自分を虜にする。

要するに、自己^{じこ}中心的に、エゴイズティックに動くような在り方を一つの法則とすれば、それは「罪の法」というやつです。神^{かみ}中心に動くのが「靈の法」だ。義の法だ。だから、靈法がある。それから、自然界の法則がある。道德の法がある。道德法、自然法、靈法、罪法があるんだ、罪の法というやつが。こういうわけだ。罪法なんていう言葉は今日初めて使うけれども、罪法というのは即ち自己中心なんだ。エゴイズム、パリサイ根性です。

妙なものだね、人間というものは。自分を主張し、自分を活かすという、そういった法則が全然なかったら、人間は生きてられない。だから、ドラマチックな構造だと言っている。常に葛藤がある。葛藤があるが、今度は神中心の——罪の、サタンの法則に対して——靈の法則が働いてくる。これが聖靈の世界です。この聖靈は力をもっているから、どんなに罪の力が強くても、聖靈の方がなお強いんだ。だから、聖靈のバプテスマを受けると——生まれつきの人間はこいつ（罪、サタンの法則）にかなりやつつけられたり、すべったり、転んだりするよ。けれども——こっち（聖靈、靈の法則）が必ず勝つていくということをハッキリ意識して進んで行くことができるんです、聖靈が来ると。この法則は強いから。「生命^{いのち}の御^み靈^{たま}の法^{のり}」とある。ロマ書8章に入ってくると、ここへ来るわけです。

イエスですらも地上にいて、

「あなたの聖意が成るように。私ではありません」

と。「私ではありません」というのは、「自己中心の法則ではありません」ということです。

「自分ではありません、自分の願いではありません、あなたの本願が成ってください

い」



と。本願が成ってきて、キリストは神さまの懷の中に自分を投げ入れてしまっている。もう本願が自己に成ってしまっている。「大我」になっっているんだ。キリストはそういった、大我とか霊、我になっっていますからね。それでも、成ってしまったといっって彼は安心していない。いつも祈っている。それと一種の緊張関係もある。どこまでも私たちと同じ弱さを持った人間として。しかも、いつも神さまが勝っている。ある意味において、キリストほど大きな戦いをした人はないと言ってもいいくらいです。曠野でもってサタンとの一騎打で、

「サタンよ、退け！」

とやっているわけだ。だから、平伏して行かなければ。この聖霊の世界は本当にありがたい。何ものとも代えられない。

「南無キリスト」

という聖霊の世界です。

そういう罪というやつ、律法というやつがどうしようもない。パウロは、ずいぶん自分は律法のチャンピオンだと思ったところが、とんでもないパリサイ根性だった。我こそはチャンピオンだと思ったところが、どっこい、自分を立てていた。そういうパリサイ根性、サドカイ根性はどっちもダメです。それに対して福音の道は、キリスト道は違う。

それでは律法は要らないかという、逆にキリストは本当の意味で律法を全うしてしまつた。道徳法も、自然法も全部、キリストの中に入ってしまう。そして、靈法がこれを全部支配してしまう。罪法は全部滅ぼされてしまう。我々は地上では罪法としよつちゅう戦わなければダメです。けれども、その戦いは、自分の力でなく戦えます。必ず、自分の力でやっているうちは負けるけれども、キリストの中に入つて行けば勝っていく。人を陥れたり、策略で偽ったり、そういうことが本当の穢れけがと言うんです、穢れたる魂おとしというのは。嫌らしい魂です。

●死の体

それで、虜になつてしまつてどうにもならんと。

²⁴ ああ 噫われ悩める人なるかな、此の死の体からだより我を救わん者は誰ぞ。

パウロはこのロマ書7章をどういう時に書いたのだろうか、一生懸命に学者が議論するわけだ。大体、救われたパウロがなぜこんな惨憺たることを言っているのかと、これはパウロが救われない前の自分というものをそこに再現して言っているのだろうと。しかし、救われない前にこれほどハッキリと、罪と法の関係が分かるか。パウロは救われない前には、

「律法の義につきては責むべきところなし」

なんて威張っていたやつではないかと。

学者がどちらかに決めようとするのは、私は間違っていると思う。救われた後で、救わ



れない以前を見て、本来の人間というものはこんなものだとすることを、その両方の次元をちゃんと踏まえて書いている。救われた後で、パウロはこんなに悩んでいることはないですよ。しかし、本来の我というのは、どうにもならない悩みの我なんだと。そういう過去と現在の、ドラマチックな構造をここで言っているわけです。現在そのものを言っているのでもなければ、過去そのものを言っているのでもない。そういうことを言っている学者がいないんだから、おかしいね。そして、我々人間というものは本当にそうだ。救われてみると、いよいよそういう者であることが分かったと。現在形で書きながら、過去と現在と両方をひつくるめたような内容を言っているわけです。

「噫われ悩める人なるかな、此の死の体^{からだ}」

と。本来は死の体だが、救われた自分は、パウロは、もはや死の体ではない。けれども、このキリストでなければ、もうこれはどうにもならない「死の体」なんだ。罪に売られて、サタンの力の配下にあるところの死の体です。

こういった自覚は、福音を受けとらない人には分かん。

「これはちよつと言い過ぎだ。大いに立派な人もあるではないか」

なんて。いますよ、立派な人も。そこと次元が違うんです。私は立派な人を決してけなすのではない。「ふくいん」の「ふ」の字も知らない人が天国に往くでしょう。聖書をよく勉強したやつが、「どつこい、お前は待て」なんて言われるでしょう。それは分かんですよ、誰が天国に往くかは。とにかく、福音を受けとった次元では、かく叫ばざるを得ないようなのが人間だということです。

●キリストに頼りて神に感謝す

ところがどつこい、

²⁵我らの主イエス・キリストに頼りて神に感謝す、

と。「我、我」と言いながら、今度は「我」と言わないですよ、「我ら」と言っている。だから、単数も複数も、どつちも彼は自覚しているんです。深刻に言うときには「我」、個の問題としている。今度は、本当にみんな救われると。

然れば我みずから心にては神の律法につかえ、肉にては罪の法に事^{つか}うるなり。

「罪の法に事うるなり」というのは、「今、仕えている」ということではない。「罪の法の下にあるものだ」ということです。「みずから心にては神の律法につかえ」とある。内的な人間としては神の律法につかえ、また、肉、サルクスにおいては、即ち我執的な生来の間人としては、罪の法につかえている。そういう人間なんだと、一般的に。「今、現に私は罪の法につかえている」と、そういう意味ではないですよ。これは間違えては困る。

8章に來ると、もうハッキリと御霊の世界のことを言っています。その前哨段階として、パウロは、先ず本来の人間というものがどれほどしようがない者かと。しかしながら、キ



リストの贖いにより、また「我らの主イエス・キリストによって神に感謝す」と言っている。7章はそういった、律法、罪、我という関係を徹底的に語っているわけです。しかし、この構造はただ論理的に割り切れるような構造ではない。それで、

「律法は霊なるものであって、律法を行う者は生くる」

ということを実際に実践したのはキリストだけです。律法は神の聖意だもの。律法も本来は霊的なんだから、霊にして聖なるものだから。霊にして聖なる神の聖意の法的な表現で現れたものが律法だけれども。しかし、キリストはしよつちゅう、神さまの言葉を活ける律法として、本当にそれに従って、神さまに活かされていた。キリストは神さまに活かされていた。霊法であり、聖法であるんです。それを神の本願として、霊願として受けとって生きていたのがキリストです。

ところが、自己中心のサタンというやつ配下にあつて、自己中心の人間、それが「罪び」ということです。そして、「その価は死なり」という。その自己中心の罪の価は死である。罪びとであり、また死である。「この死の体」という。そいつをキリストは十字架で贖いとった。

「それを全部、私が引き受けた」

と。律法は活かすものであるのに、逆に罪を刺激するというような体験の仕方をお前たちはしたから、とんでもないと。

だから、律法は本当は

「汝殺すなかれ」

ではなかった。

「汝は殺人はしない」

というのが律法の本当の意味ですよ。

「汝は殺人はしない。私がお前の神だから、殺人なんかできるはずはない」

というのが律法の根本精神です。本当はこれが霊法なんだ。けれども、イスラエルの民はそういうように取らなかつた。パウロも律法は「殺さず」と書いてあるとは言わなかつた。律法は実は、

「汝殺さじ。われ汝の神なればなり」

ということ。神さまの言葉は相手を信じかかっている。

「お前は勉強する。だから、試験はしない」と、これが本当の学校はそうなんだ。ところが、怠けるから、試験をせざるを得ない。「お前たちはカンニングはしない。だから、監督はしない」と。先生方もその気合で教育してくれなくては困るんだよな。

●法則に乗っかっていることが自由

十字架でもって、もうその罪からも解放された。本当は律法は縛るものではなかつた。律



法は本当は、力を与えるものであったけれども、縛るものとしてしまったのが、実は罪なんです。律法を「拘束するもの」というように感じているのが、即ち自我という罪が律法を「拘束するもの」と思う。「律法は縛るものだ」とパウロは言っているけれども、本当は律法は縛るものではなかったんだ。律法に乗っかって行けば、律法は自由を与えるものなんだ。

「法則に従うこと、これ自由なり」

とレッシングも、ゲーテも言ってます。法に乗っかることが自由。自然法に乗っかっていくから、必然なんです。必然が自由なんです。

「天然」というのは素晴らしい言葉です。私は大好きなんです。今、風が吹いていれば、木の葉が揺れているでしょ。そして、太陽の方に向かって枝葉を張るでしょ。それはみんな天然の法則に従っている。「ああ、なんと天然はいいな、自然はいいなあ」という。これは物理法則に従っているからです。法則に乗っかっていくことが天然、自然、自由なんです。人間が道徳法則に本当に従っていれば、それが自由なんです。道徳法則に従っているのが本当の自由です。

「汝は為し能^なう。なんとすれば、汝は為すべきであるから」

とカントが言った。「すべき」の世界を本当に受けとれば、それは「できる」んだと。しかしながら、「すべき」の世界を本当にできたのはキリストの他にいないんだ。道徳法則をやつと孔子が、

「わが思うところ矩^{のり}を踰^こえず」（七十にして心の欲するところに従って矩^{のり}を踰^こえず）」

なんて言った。七十になってやつと、法則を超えることがなくなりました。自分の思うところと法則とが一つになりましたと。孔子のことを聖人なんて言っているんだ。七十になつて孔子はそこへいった。キリストはもう始めつからだ。ソクラテスも法に従って死んでいった。けれども、彼はもつと大きな法則、「ダイモニオン」の中に生きた人ですよ、もちろん。

●聖霊の力

だから、律法は縛るものではないんです、本来は。律法は私たちに自由を与えるものだ。生命を与えるものだ。それを「縛る」ものと考え、パウロがそう言っているのは実は、この罪というやつです。罪という力です。自我という、肉というやつなんです。罪も肉も私もみんな同じです。自己中心を肉という。それは罪の力には勝てない。罪の主体はサタン。そのサタンと罪と死と地獄。この四つを四位^{よんみ}一体という。こいつをひっくり返して、これに勝ったのがキリストです。

「我れ既に世に勝てり」

というのが、キリストはそれです。だから、本当に神さまの奴隷となつて、そして、本当の自由を持ったキリストが、罪の奴隷となつた我々のために十字架にかかつて、そして贖



ってくださった。

「全部、私が引き受けた。お前たちは、もう一切その支配下にいないんだ。だから、私の中へ入って来い」

と。それなのに、「十字架は贖罪」という命題をただ信じて、キリストの中にちつとも入って行かない。これがいわゆる観念信仰というやつです。キリストの中へ入って行かなくてダメですよ。それは祈りの世界で。

「十字架で既に捨てられてありました。私たちは空気に囲まれているように、キリストの霊の中に入りました」

と、気がつかなくてはいかん。現にこんなに救われている。そういう世界です。そうしたらもう、俄然、力がくる。身心共に力が来る。本当に。これは力がなかったらダメだよ。サタンは力を持っているんだから。それ以上の力の世界に入らなかつたら、どうにもならんよ。

「神の国は言葉にあらず、能力なり」
ちから

とパウロが言ったのは、この聖霊の力のことを言っている。へこたれてはダメですよ。いろんなことに出つくわせば出つくわすほど、いよいよ力強くなってください、この聖霊の世界にあつて。

「どんな問題が来ても私は大丈夫です。これはキリストの力が、キリストがわが中に生き給うがゆえに。世の中のどんな問題にでつくわそうが、どんな窮状に入ろうが。いわゆる不治の病にかかろうが、どつこい、私の中には病より力強いものが来ています」

と。そういうようなクリスチャンが一体、幾人いるんですか。けれども、それは誰でもがなれるんです。一番簡単なんです。一番簡単なことをみんな難しくしてしまつて、七面倒臭くしてしまっているから。私はどこまでもまだ戦わざるを得ない。

私は今度は、著作集第七巻の題を『聖書の人ルター』ではなくて、『戦いの人ルター』と書こうかと思うけれども。まだ分からないよ。ちよつと、まだ簡単に死ぬわけにはいけませんよ。まあ、そうだな。あのノストラダムスの予言のように、1999年に世界が原子力戦争で爆発したら、そうしたら死ぬことにしようかな(笑)。それまでは地上で、福音のために私は仕事があるよ、正直。寝ぼけたようなクリスチャンばかりいるから。終わります。

